

4月の初め、私は鹿児島島の教会に管理牧師で出かけていた日ですが、私の説教を宮崎では読んでいただくことになっていましたので、覚えておられるかもしれません。イエス様がエルサレムの東、ベタニアに住む、マルタとマリアの姉妹の兄弟ラザロが亡くなったのを生き返らせるお話についてです。「イエス様の憤り」というタイトルにしましたが、イエス様は何に対して憤られたのか、という問題でした。イエス様は、葬式、死ぬことに対して、ただ悲しんで、絶望している人々への「憤り」が2度も出てきていることについて、話しました。そして黒澤明監督の「夢」という映画では、人間の死ぬことを、まるでお祭りのように受け取っている場面を紹介したと思います。

今日の福音書を見ると、これはイエス様が十字架に架けられる前の晩に弟子たちに語られた場所が選ばれています。お葬式や逝去者記念の式にも読まれる福音書になっているんです。まあ、正確に言うと、今日の福音書はヨハネ14章1～14節ですが、記念式では、1～6節までになっていますが、印象に残るのは、2節目の「わたしの父の家には住む所がたくさんある」という言葉です。

今日は、私のお葬式の理解というか、イエス様についての理解を語ります。

私たちは、親しい人が亡くなることになると、嫌な気持ちになります。教会では、日曜日の礼拝のほかに、結婚式同様、お葬式も行います。お葬式に出席する時は、結婚式のような、ウキウキした気持ちにはなれません。どうして、私たちは、死ぬことが嫌なのでしょうか。

親しい人が死ぬ、というのは、今まで言葉を交わしていた人が、返事をしてくれない。親しい人と別れなければならない、淋しさがあるからだ、ということはすぐに思いつきます。しかし、その場合は、自分の死ぬこととは関係ありません。たとえ家族であっても、自分とは違う他人事です。

自分自身の死ぬことについて考えてみましょう。私たちはどうして、自分の死ぬことが嫌なのでしょうか。その理由のひとつは、死ぬ前に、苦しまなければならない、ということです。

私は以前、末期がんのひとが、苦しみながら呼吸している様子を見ることがありますが、あんなに苦しんだ末に死ぬ、というのは、本当に大変なことなんだなあ、と思います時、苦しんだ末の死を、自分もいつかは体験するのだろうか、と考えると、死ぬことが嫌になります。しかし、このような死ぬ前の苦しみは、大変ですが、現代医学の進歩によって、少しずつですが、その痛み、苦しみは、やわらげられ、克服されています。

しかし、それでも、私たちが死ぬことを嫌になる理由がもうひとつあります。それは、死んだあと、私たちはどうなるのか、その先がわからないことについての不安があるのではないかと思います。私たちは、死を味わったことはありません。私たちは長年かけて、それぞれ、業績を積み上げてきたのに、自分の死によって、それは自分にとっては、すべて無になるのだろうか。自分の存在は、もう消滅してしまうのだろうか。それとも、行ったこともない、恐ろしい所へ連れて行かれるのだろうか、など考えると不安になるのです。

死ぬことを、私たちは、旅にたとえることがあります。まだ自分が行ったこともない世界に旅立つことへの不安みたいなものです。

私は神学校を卒業して2年間、八幡の教会に住んでいました。そしてその最後に、あの時は父が金を出してくれて、神学生の弟と私は、初めて、聖書の舞台となったイスラエルに行きました。それまで、フィリピンには、学生時代キャンプをするために出かけたことはありましたが、飛行機を何回も乗り換えて旅をする本格的な聖地巡礼は初めてでした。この時、私には不安はありませんでした。初めて見る土地に興味津々でウキウキしていました。そして、そのまま楽しむことができました。

その2年後、司祭になって、そのお祝い金を使って、2回目の聖地旅行を計画したのです。大牟田に移って3週間くらいした時に、エジプトからシナイ半島を抜けてイスラエルへ入る旅行です。

ところが、私が旅に出る1週間前に、イスラエルでユダヤ人とパレスチナ人との間に衝突があり、何人かが死んだ、というニュースが流れました。それまで、ウキウキしながら旅行の日を待っていたのですが、とんでもない所へ行くことになるんだ、と思うと、私は急に不安になってきました。旅行中大丈夫だろうか、無事に帰って来られるだろうか、そんな気持ちが私の頭を駆け巡っていました。

普段は、お葬式などの時、初めての聖地旅行ということにして話すんですが、実際には2度目の時、1988年でした。このころから、イスラエルの占領地区で、パレスチナ人たちが、インティファダ『振り落す』という意味のアラビア語で、「蜂起」「反乱」を意味する活動が盛んになっていたのです。始まったのは、1987年の12月でしたが、そのあと次々にイスラエルでは衝突事件が発生したわけです。

そんな時、私の友人の一人が電話してきました。「恐ろしい事件があつて、不安になっているんだろう。でも、大丈夫だよ。イスラエルのガイドさんはどこが危険か良く知っているので、決して危ないところには連れて行かない。だから、安心して旅を楽しんだらいい。」と言うのです。この友人は、1年間、イスラエルで生活していて、よく中東の事情を知っている人だったのです。

これが、もし、イスラエルに行ったこともない人が「案ずるより産むが易しだ」「渡る世間に鬼はなし」などと言ってくれたって、私はその人の言うことは信用できません。しかし、旅先に住んだことのある友人が、その経験から語ってくれた言葉は、私を安心させるのに十分でした。そして、私は安心して、イスラエルに旅をすることができました。そして、これまでに私はイスラエルに5回行くことができました。そしてそのうちの3回目には、2ヶ月イスラエルに滞在し、研修を受けることもできたのです。

先ほど読みました聖書には、イエス様が十字架に架けられる前の晩、最後の晩餐の時に言われた言葉が出てきました。

「わたしの父の家には、住まいがたくさんある。」

ここで言うわたしの父とは、神様のことです。イエス様は、明日は殺されて、あの世に旅立たなければならない、という時に、「あの世の神様の所は、素晴らしい場所だ。」と弟子たちに言っているのです。

イエス様がこの世に生まれたことの目的は、この「わたしの父の家には、住まいがたくさんある。」ということをおわたしたちに知らせるためだった、と言っても過言ではないと私は信じています。

わたしたちは、死ぬということを経験したことはありません。死ぬことに対して、特に死んだ後、どうなるのか、と不安な気持ちになっている私たちを、安心させるために、神様の所からイエス様が、「死んだら、あの世は、素晴らしいところだぞ。」と伝えるために、この世に生まれたんだ、ということです。

それは、ちょうど、今まで行ったこともないイスラエルへ不安な気持ちで旅立とうとしている私に、イスラエルに住んでいた友人が電話をかけてくれたのと同じことだろうと思います。

歴史の教科書では、イエス・キリストというのは、キリスト教を始めた宗教家の一人のように紹介されています。しかし、もしそうなら、イエスは単なる人間に過ぎません。

そんな人間の一人であるイエスが、たとえどんな立派な教を説いても、「あの世は素晴らしい所だ。」と言葉が、あの世に行ったこともない人の、勝手な作り話なら、イエスという人物は、私たちにだます、ペテン師か、観てきたような嘘を言う講釈師ということになります。

そして、そのイエスの言葉を信じているキリスト教徒の私どもは、愚か者ということになります。

しかし、もし、このイエスが、死ぬことへの不安におびえている人間を安心させるために、あの世にいる神様の所から、私たちの所へ使わされた「神様のひとり子」である、と信じられたなら、私たちは、この方の言葉を信じて、やがて遅かれ早かれ訪れる、私たちの死への旅を、おびえることなく、楽しみでさえあるのではないのでしょうか。

今日の福音書は、イエス様が逮捕される直前に弟子たちに語られたお話です。この言葉を素直に信じて、生きる者でありたいと思います。